

平成28年度 第2回 「有明海自然観察会」 記録

日 時	平成 28 年 6 月 21 日 (火) ～ 6 月 23 日 (木) 天候 曇り～雨
観察地	① 佐賀県太良町 有明海アサリ再生実験場 (潮干狩り) ② 諫早市 諫早湾潮受け堤防 ③ 島原市 雲仙岳災害記念館 ④ 柳川市矢部川河口 (ムツゴロウ観察) ⑤ 久留米市 筑後川大堰 ⑥ 下筑後川漁協エツ中間育成センター
講 師	① 地元漁師 平方宣清氏 ② 小宮春平君等学生 3 名 ③ 伝習館高校教師 木庭慎治先生 ④ 地元漁師 田中安信氏 ⑤ 下筑後川漁協中間育成センター長 塚本辰巳氏
テーマ	有明海干潟再生によるアサリ漁、およびエツ漁復活に向けての取り組みを現地で学習する
備 考	参加者数 22 名 + スタッフ 5 名 (田中 克先生、樋野 巧、森本真弓、西尾光市、飯田正恒) 計 27 名 記録 西尾

この 3 日間、北部九州地方は豪雨に見舞われ活動遂行が危ぶまれたが、日中奇跡的に雨が止み、ほとんど支障なしに行動できた。幾多の困難の中で有明海の再生に取り組む上記講師のお話には私たちの胸を強く打つものがあつた。以下はその要旨。

1. 平方宣清氏講演要旨 (於 蟹御殿にて)

有明海は閉鎖性の海であるにもかかわらず、赤潮が発生しなかったのは、早い潮流で海水が攪拌されることによるが、諫早湾の潮受け堤防を閉めた翌年から赤潮が発生し始め、スズキ、アナゴ・ヒラメ・アイナメなどの魚が死に、20 年に亘り護り育ててきたタイラギ漁も全滅した。潮受け堤防締切で潮流の方向が変化し、泥の攪拌機能が低下したことが赤潮発生 of 根本的な原因と信じている。国に問題解決のための関係者との話し合いの場を設けるよう要請したが協力を得られず、やむなく開門を求める訴訟をおこした。現在二つの裁判所で異なった判決が出る混乱の根本的な原因は、自分達の描いた構想を担保する学者達の意見にのみ耳を傾け、困窮する現場の実情に背を向ける行政の姿勢にあると思う。かつて隆盛を極めた多良町の漁業の復活をめざし、諫早湾潮受け堤防をめぐる戦いが続いていることを知っていただき、支援をお願いしたい。



平方宣清氏

2. 平方宣清氏の説明要旨 (於 諫早湾潮受け堤防にて)

潮受け堤防建設の動機は、1957 年の諫早大水害再発の防止と農業用水確保とされるが、いずれもかくも巨大な堤防を築く理由にならないことは政府も認めている。当初の建設費見積り 1500 億円に対し 2500 億円が投じられた。一方、干拓事業での造成農地は、減反政策の影響で当初計画の半分程度の面積にとどまり、しかも、アオコなどで汚染された調整池の水を農業用水として利用していることから、農作物の市場での評価は低くなり、撤退する事例も発生している。

長崎県には三つの漁協があるが、開門についての態度は様々で、開門に反対する漁協では、国からの毎年 1 億円にのぼる補償金で中国からアサリを買入れ、有明海産と称して国内に販売している。一方で、開門に賛成する漁協への補助金は低く抑えられ、組合存続の危機に迫られている。

平成 13 年、対岸の荒尾ノリ養殖に異常が発生した。そんな経過から、今日では、熊本・福岡漁連も開門を要求する立場に変わってきた。議員を通じて政府にも働きかけてきたが、現状を変えようとしない官僚の抵抗は強力で限界を感じている。しかし、最近は「命を守る本質的な取り組み」に関心をもつ議員や官僚も出てきている。そういう人達が確信をもって対処できるようサポートする仕組みや体制を我々自身が作らないといけないと考えている。

3. 小宮春平君等学生 3 名による有明海の現況と有明海塾活動の説明要旨 (於 白柳荘にて)

有明海の生態系は氷河期に日本列島が大陸と地続きにあった頃の影響を強く受けている。例えば、有明

海のスズキは、大人になっても背中に斑点が残るタイリクスズキの特徴を持ち、日本産と大陸産の中間的な存在である。一方で、有明海には希少生物が多く、アリアケシラウオ、アリアケヒメシラウオは絶滅危惧種であり、有明海の奥部のみに生息する。ヤマノカミ(カジカの仲間)、ハゼクチ(体長 50cm を超える日本最大のハゼ)、有明海の普通種であっても他の海では希少種であることが多い。残念ながら、有明海は生き物の楽園から絶滅の場へと変化しつつある。その原因は、①筑後川大堰と大量取水。②諫早湾潮受け堤防問題。③海苔養殖で使用する酸や肥料の漁業への影響問題などである。有明海の漁獲量の減



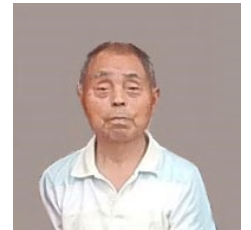
小宮春平君達 少は 30 年程前から始まり、それまでは大量に獲れていたが、今では著しく少なくなり、捕獲したエツ成魚から採卵して受精させ、1 ヶ月程育てて放流する取り組みを行っているが、回復への道は遠い。有明海のこんな現状を変えようと、有明海塾で地元の大学・高校の学生達を中心になって活動している。1 例として①キレートマリンの効果測定 ②掘割でのウナギのモニタリング ③啓発活動としての高校生サミット チリメンモンスター教室などである。将来の夢としてウナギ水族館構想を持っている。

4. 木庭慎治先生の説明要旨 (於 白柳荘にて)

伝習館高校生物部は、1 年前から九州大学の望岡先生にシラスウナギの特別採捕の許可を取っていただき、シラスウナギの採捕と飼育を行っている。将来柳川の掘割にニホンウナギを呼び戻すために必要な施策を提言するなど、「有明海はみんなのものという思いを一人一人が持つことで、有明海的环境は少しずつ良くなる」ことを信じ、このような取り組みを行っている。

5. 塚本辰巳氏の説明要旨 (於 下筑後川漁協にて)

筑後川に昭和 62 年、河口から 23km の地点に筑後川大堰が出来てから漁獲が激減した。大堰が出来る前には潮が河口から 8km 上流まで遡っていたが、今では大堰でストップしている。エツ漁は、昭和 54 年～57 年頃 110 トンの漁獲があったが、年々減少し平成 22 年には 20 トンにまで落ち込んだ。対策として平成 4 年から人工授精卵の放流を、また平成 10 年より種苗生産を開始、年々放流数を増やしている。エツは国内では有明海にしか生息しない貴重な魚であり、絶滅危惧種に指定されている。普段は島原半島沖の有明海に生息し、産卵時に川を遡るが、塩分濃度の低い大きな河川でないと産卵出来ない。



塚本辰巳氏

エツの増殖技術は、メスから採卵し、オスの精液 2～3 匹分をかけ羽根や筆などでまんべんなく攪拌、2 日ほどで仔魚が生まれる。エツは水中ではプランクトン、エビ、アミ類を食べている。養殖場ではワムシを一日 1 匹～20 匹食べさせて、少し大きくなったらアルテミアにビタミン剤をコーティングしたエサを与えている。水槽には約 9 万匹の仔魚がいる。今年は雨が多かったためにエツの遡上が少なく心配している。

【田中 克 先生まとめ】

有明海の腎臓機能ともいえる干潟と、心臓機能ともいえる筑後川が、諫早湾潮受け堤防・筑後川取水大堰・コンクリート護岸などの自然環境への配慮を欠いた人工物などの影響により環境が悪化し続けている。そんな中で、今回の観察会で見るとべきポイントは二つ。一つは、アサリ干潟の再生や、さらにはその延長線上の柳川の掘割のウナギの復活などの個々の取り組みを、総体として繋ぐこと、もう一つは、高校生・大学生などの若者とシニアの思いを繋ぐしくみを構築すること。柳川のうなぎ復活の取り組みは、環境省が意図する全国 8 か所のモデル地域への指定を目指しており、もし実現すればより多くの市民の共感と行政のバックアップが期待できる。こうした活動を全国に広げるための協議会の立ち上げを意図しており、シニア自然大学校に賛助会員として名を連ねていただければありがたい。平方さん、田中さん、塚本さんにはすでに NPO 法人「SPERA 森里海・時代を拓く」の会員になっていただいているので皆さんとの繋がりが出来る。

以上